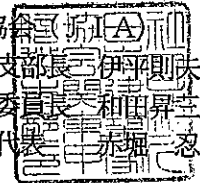




2009年9月29日

株式会社博報堂
代表取締役社長 成田 純治 様

社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 支部長 伊平 剛夫
同 保存問題委員会 委員長 和田 昇三
同 千代田地域会 代表 赤堀 忍



「博報堂旧本館」の保存活用に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

貴社におかれましては、広告業界のリーディングカンパニーとして長年にわたり広告・宣伝の分野において優れた創造活動を展開していることに深く敬意を表します。

さて、新聞報道等により、貴社が東京都千代田区神田錦町に所有する「博報堂旧本館」を解体する方針であることを知り、驚きを禁じ得ません。

ご高承のように、「博報堂旧本館」は1914年に神田錦町に移転した貴社の本社屋として、1930年に瀬木商事合名会社により建設されました。当時貴社の取締役社長であった創業者の瀬木博尚氏(1852-1939)が建築家・岡田信一郎(1883-1932)に本社屋の設計を依頼した経緯は明かではありませんが、岡田は様式建築の名手として知られており、その作品は大阪市中央公会堂(1917年竣工)や明治生命館(1934年竣工)が国の重要文化財に指定されるなど現在でも極めて高く評価されております。

その岡田の設計による「旧本館」は、正面の巨大なドリス式風円柱などにより新古典主義的な様相を見せながらも、本石より柔らかな印象を感じさせる人造石「カストストーン」を外壁に採用し、また、東南角に建てた塔にはアールデコの造型感覚を持ち込むなど、成長する民間企業にふさわしい清新な感覚の建築となっており、岡田最晩年の重要作品と位置づけることができます。旧本館にはその後度重なる増築が行われましたが、初期の増築と思われる正面左側部分は岡田の意匠をよく咀嚼、継承したもので、本建築にたいする貴社の深い愛情と理解を感じさせるものです。また、度重なる増築や別館の建設をもってしても成長する貴社のキャパシティを賄いきれず、多くの部門が別の地へと転出した後も、長年にわたり貴社のシンクタンク部門等により使用され続けていたと聞き及んでおります。

先達の精神は、それを支える「もの」があってこそ、次世代に継承可能であると考えます。現在貴社が検討されている再開発計画のなかで、貴社にとってのみならず、近年変容が著しい神田界隈の景観においても重要な位置を占める「旧本館」の存続を図ることは、多くの関係者の支持を得るものと確信いたします。さまざまな角度から検討した結果の解体の決断とも報じられておりますが、近年の歴史的建造物の保全・活用に関する技術的進歩により、耐震性や老朽化を始めとした様々な問題は克服可能な課題と考えられております。そして、これらの課題を全体として受け止めることこそ真の意味での創造行為であり、計画の決定に先行する形で解体を進めることに大きな戸惑いを感じます。

なにとぞ「旧本館」を拙速に取り壊すことなく、その価値を積極的に活かした再開発計画を立案することにより、貴社の伝統と創造に関する深い見識を披瀝されると共に、今まで同様に都市景観の形成に寄与下さいませよう、お願い申し上げます。

なお、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同 保存問題委員会及び同 千代田地域会は、「博報堂旧本館」の保存活用について、出来る限りの協力をさせて頂く所存である事を申し添えます。

敬具